

## 博多とアジアの映画(77)

松浦 仁

「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」の協賛企画として「中国語圏映画特集2」が開催された。前年に開催された「中国語圏映画特集」の2回目、地元映画関係者、学識経験者、マスコミ等で構成されたアジアフォーカス・福岡映画祭企画委員会が主催して中国、香港、台湾の秀作映画を特集した上映会だった。今回は、「歳月、人間、戦争」をテーマに「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」の会期中である9月15日(金)から22日(金)までの8日間にわたり中洲の東映グラウンドで開催された。上映作品は以下のとおり。

「傾城の恋」(香港、1984、監督 アン・ホイ/許鞍華)

「村と爆弾」(台湾、1987、監督 ワン・トン/王童)

「非情城市」(台湾、1989、監督 ホウ・シャオシェン/侯孝賢)

「ロアン・リンユイ/阮玲玉」(香港、1991、監督 スタンリー・クワン/關錦鵬)

「暗戀桃花源」(台湾、1992、監督 スタン・ライ/瀨聲川)

「さらば、わが愛く霸王別姫」(中国・香港、1993、監督 チェン・カイコー/陳凱歌)

「ジョイ・ラック・クラブ」(アメリカ、1993、監督 ウェイン・ワン)

「雲南物語」(中国、1994、監督 チャン・ヌアンシン/張暖忻)

近代の中国語圏においても有名無名であれ、ある人物の半生、あるいは生涯を語るには、その長い年月の中で起こった国や社会の情勢、とりわけ戦争というものを避けることはできない。この「歳月、人間、戦争」をテーマに最も合致しているのが、ホウ・シャオシェン監督の代表作であり、福岡ではもう何度も自主上映されている「非情城市」だ。1945年8月15日、太平洋戦争における日本の敗北を告げる昭和天皇の玉音放送ではじまるこの映画は、51年にわたる日本統治から解放され、その後の国民党政府樹立までの台湾の4年間の変革の歴史を台湾北部に住む林家の4人の息子たちの暮らしをとおして描いていた。

チェン・カイコー監督の「さらば、わが愛く霸王別姫」は、ふたりの京劇役者の愛憎を日中戦争から文化大革命へと続く50年に及ぶ中国の激動の時代を背景に描いた壮大なドラマだった。すでに、KBCシネマ北天神で3カ月間にわたりロングラン上映されていた。ワン・トン監督の「村と爆弾」は、太平洋戦争期の台湾のある村で見つかった不発弾をめぐる混乱をコミカルに描いて戦争の悲惨さと無意味さ、さらに

日本占領下の台湾の人々の苦境を浮き彫りにしている。アン・ホイ監督の「傾城の恋」は、第2次世界大戦開戦直後の上海で、イギリス帰りの青年と離婚したばかりの旧家の娘との恋の駆け引きを描いていた。チャン・ヌアンシン監督の「雲南物語」は、日中戦争の残留孤児となった一人の日本人女性の数奇な一生をとおして夫婦の愛を描いていた。

「ロアン・リンユイ/阮玲玉」は、1930年代の上海映画界のトップスターとして活躍するなか、25歳の若さで自殺した阮玲玉の生涯を描いた伝記映画だった。阮玲玉と親交のあった当時の映画人たちのインタビューや、この映画自体の創作過程でのスタッフ、キャストのディスカッションが阮玲玉最後の6年間のドラマとともに重層的に描かれていく。すでにソラリアシネマ3で公開されていた。

スタン・ライ監督の「暗戀桃花源」は、劇場の手違いでリハーサル時間が重なった二つの劇団が、対照的な悲劇と喜劇を交互に上演することから生じる混沌が台湾の現実を映し出していく。そして、アメリカで製作されたウェイ・ワン監督の「ジョイ・ラック・クラブ」は、中国から新天地アメリカへ渡った4人の女性と中国系アメリカ人と

して育った娘たちの葛藤と心の絆をとおして失うことのない民族のアイデンティティとヒューマニズムを主題にしていた。

「中国語圏映画特集2」のチケットは、「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」と共通であり、通し券で見ることでもできた。東映グラウンドの座席数は476席だが、「中国語圏映画特集2」の入場者数は、平均すると130人程度だった。同時に「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」の上映を2会場でおこなっていたのだが、選りすぐりの中国語圏映画の上映とあって、多くの入場者があった。

最も入場者が多かったのは、初日の15日(金)の16時からの回だった。上映作品は、「さらば、わが愛く霸王別姫」で、324人が観覧した。一方、同じ回のソラリアシネマ1が、タイの「ある時一度」で225人、明治生命ホールがイランの「戦火の中で」が107人だったので、「さらば、わが愛く霸王別姫」が一番の入場者数だった。東映グラウンドでの総入場者は3千882人だった。ちなみにソラリアシネマ1での入場者数がオープニング上映を含めて7千754人、明治生命ホールが7千131人で、ほぼ同じ入場者数だった。

「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」の総入場者数は、8月4日(土)、5日(日)

の福岡市美術館講堂でのプレイベント上映会609人と8月8日(水)の南区鶴田公民館でのユニバ・イラン応援校区上映会を含めると1万9千278人で、前年比113%だった。数字的にも盛り上がったのだが、この年が充実のプログラム、豪華なゲスト、各会場の活況、内外の注目度など、あらゆる意味で「アジアフォーカス・福岡映画祭」のピークだったと思う。

福岡市は、1989年にアジア太平洋博覧会を開催して以降、翌年には「アジア太平洋都市宣言」を制定し、毎年9月に「アジアマンス」を開催することとした。そして、1995年には「ユニバーシアード」を開催して、バブルがはじけて日本経済が沈下しているのに、福岡市は全国で唯一ともいえる元気な都市と言われていた。その一翼を担ったのが「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」だった。

「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」

の特別プログラムは、イラン映画特集だったが、イラン映画界の代表的な監督であり、イラン映画を世界に知らしめたアッバス・キアロスタミ監督の作



品はプログラムに入っていないかった。しかし、「アジアフォーカス・福岡映画祭'95」の会期中である9月16日(土)から22日(金)までシネテリエ天神で1990年製作の「クロローズ・アップ」が公開された。「クロローズ・アップ」は、ある貧しい青年がイランの有名な映画監督の名前を騙り、映画好きの家族を架空の映画製作に巻き込む詐欺罪に問われた、という実際の事件をもとにして、裁判などのドキュメンタリー映像と劇的再現で構成した異色作だった。その有名な映画監督とは、第1回目の「アジアフォーカス・福岡映画祭」で上映した「サイクリスト」のモフセン・マルバフだった。

さらに、シネテリエ天神では、年末にかけて中国語圏の映画を連続上映した。上映プログラムは、以下のとおり。

「恋する惑星」9月23日(土)〜10月27日(金)

「愛情萬歳」10月28日(土)〜11月3日(金)  
「エドワード・ヤンの恋愛時代」11月4日(土)〜11月17日(金)  
「金玉満堂 決戦!炎の料理人」11月10日(土)〜11月17日(金)、レイトショー  
「欲望の翼」11月18日(土)〜12月1日(金)、レイトショー (詳細は次号で)

＝ 図版は、「さらば、わが愛く霸王別姫」＝

督であり、イラン映画を世界に知らしめたアッバス・キアロスタミ監督の作